

# 月刊 地域支え合い情報

東日本大震災の被災者を支援するあなたのための情報紙です。



特集

## 未来につながる仲間づくり

全国から寄せられた着物を背に、手を動かしながら談笑する「いいたてカーネーションの会」の皆さん

### 特集◎未来につながる仲間づくり

- 仮設住宅での「絆」を法人化  
おがるスターズ (宮城県松島市) ③
- 頼り上手はつながり上手  
卸町五丁目仮設住宅自治会  
(宮城県仙台市若林区) ⑤
- 一緒に帰ろう、故郷へ  
少しがんばろう会 (宮城県亶理町) ⑦

### ☆専門家に聞く地域づくりのヒント

広域避難者の暮らしを支え合う情報紙  
「つなぐ・つながる・支え合う」vol.1を挟み込みました。  
独立行政法人福祉医療機構／平成24年度社会福祉振興助成事業

### インタビューあの人に会いたい③

特定非営利活動法人@リアス NPO サポートセンター  
いわて連携復興センター 代表理事 鹿野 順一さん  
(岩手県釜石市) ⑨

まちの仕組み②住民同士の交流を広げる支援活動  
(宮城県山元町) ⑩

事例をとおして考えよう! ⑫  
専門家が話す☆支援のツボ

市民リレー◎東北の元気③  
ボンボンカフェ (宮城県石巻市・東松島市・女川町) ⑭

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ ⑮

場の力◎集いから生まれる活力③  
いいたてカーネーションの会 (福島県飯館村) ⑯

- ・読者の声
- ・購読者を募集しています!
- ・次号予告
- ・編集後記



特集



# 未来につながる 仲間づくり



震災によって離れ離れになった仲間もいれば、  
新たに出会った仲間もいます。

宮城県東松島市にある、グリーントウンやもと仮設住宅の  
住民で結成した「おがるスターズ」は、仮設住宅で築いた絆を  
仮設住宅から出たあとも継続できるよう、法人化を目指し、  
仮設住宅内外のコミュニティづくりを行っています。

宮城県仙台市若林区にある卸町五丁目仮設住宅の自治会では、  
バラバラの地域から集まった住民同士の交流を深めようと、  
“役割をもつこと”と“グループ活動”に力を入れています。

そして、宮城県亘理町では、震災により、住む場所が離れ離れになってしまった  
荒浜地区の住民たちが、一緒に故郷へ戻る日まで町内会のつながりを維持するべく、  
「少しがんばろう会」を結成し、活動しています。  
いま仲間をつくること、共に過ごすことは、きっと私たちの明日に彩りを添えるはず。  
3か所の素敵な「仲間づくり」を紹介します。





宮城県  
東松島市

# 仮設住宅での「絆」を法人化

「おがるスターズ」(宮城県東松島市)

## 成長する人たち

宮城県東松島市大塩にあるグリーンタウンやもと仮設住宅で暮らす住民たちが、仮設住宅のコミュニティづくりを担う「おがるスターズ」を結成。一般社団法人として活動することを目指し、仮設住宅で開催されるお茶会や小物づくり、子育て支援などの活動を続けている。

東北の方言で「成長」を意味する「おがる」、そして、「人たち」を「すたづ」と呼ぶことから、おがるスターズ(成長する人たち)と名付けた。「今はさまざまな支援があるが、仮設を出たらそうはいかない。支援がなくなってもみんなで活動を持続される体制にしないと」。そう話すのはおがるスターズ代表の内海聡子さんだ。法人化により、仮設住宅を離れたあとも活動したいと考えている。

きっかけは、みんなが集う居場所づくり

グリーンタウンやもと仮設住宅には、東松島市内の

各地から避難した265世帯が暮らしている。おがるスターズ設立のきっかけは、仮設住宅入居が始まった2011年5月から7月までの間、管理する人がいなかったために、集会所が閉鎖されていたことにある。また、まだ自治会も発足されていなかったため、仮設住宅での行事がまったくない状態。「みんなバラバラの地域から来たけど、なぜか最初から仲がよかった。でも集会所が開いてないと、みんなで集まる場所がないと思ったんです」。住民有志4人で集会所を管理し、毎日開放。みんなが集まり、つながりが生まれ



男性も小物づくりに参加



## おがるスターズ 会長 内海 聡子さん

「せっかく出会ったんだから、どんなに短い間でもみんな楽しく過ごしたい。ずっとつながり続けられるように」

るような仕組みづくりを考えた。

### 笑い声の絶えない集会所

ただ集会所を開くだけでは人は集まらない。そこで、お茶会の開催のほか、陶芸教室・パッチワーク教室などのカルチャー講座、小物づくり、子育て支援、季節のイベントを企画・実行した。2011年9月に発足した自治会が、防災や環境整備を担当と、役割を分担。仮設住宅内での活動を自治会役員だけで行うことによる疲弊など、過度な負担がかからないように配慮しているのだ。

現在「おがるスターズ」のメンバーは30歳代から70歳代までの20人。仮設住宅で行われるイベントを積極的に手伝ってくれていた入居者たちが仲間に加わった。小物づくりなどでは、ほかの仮設住宅ではなかなか見られない男性の姿が。力作業を手伝っているうちに、自然と集まるようになった。小物づくりの合間にお茶やお菓子を頬張りながら男女入り交ざり、和気



子どもたちと夢中になって工作を楽しむ

あいあい。笑い声が絶えない、活気ある集会所だ。

### 地域全体の

### コミュニティづくり

自分たちの仮設住宅内だけ

けでなく、ほかの仮設住宅の住民たちにも企画したイベントへの参加を呼びかけていることも、おがるスターズの特徴だ。毎月作成する行事予定表を、近隣の仮設住宅にも配布している。そのおかげで、グリーントウンやもと仮設住宅の入居者でない人もイベントを楽しむに集まる。また、カルチャー講座の講師には、その道のプロをボランティアとして招くだけでは

なく、地域の芸達者な人たちも協力。イベントをとおして、なかなか顔を合わせることのない仮設住宅内外の人たちが出会い、つながる場になっていく。「いろんな人と話せて楽しいよ」「二人で部屋にいたってつまらないしね。外に出ればみんながいるんだから」そんな声が聞かれた。

そのほかにも、子ども担当のメンバーが外部の保育士資格をもつ人たちの力を借りながら、子育て中の母子と集会所でお話や工作を楽しむ子ども支援活動を行っている。

### いま、仲間をつくること

住民からおがるスターズの名前が出ることはないという。「たぶん知らない人のほうが多い。でもそれでもいいと思ってるんです」と内海さん。作成している行事予定表にもおがるスターズの名前は書いていない。

「私たちは裏方。コミュニティづくりの協力者なんです」。自分たちが主体となるのではなく、住民の一

人として、コミュニティが生まれ、育まれていく過程に参加し、支えるという姿勢だ。取材中に内海さんが話した「せっかく出会ったんだから、どんなに短い間でもみんな楽しく過ごしたい。ずっとつながり続けられるように」という言葉が印象的だった。

震災により、新たな出会いがあり、そしていつかまた別れる日が来る。それでもいま、仲間をつくること、仲間と過ごす時間がいかにかけがえのないものなのか、多くの住民の声にぎわう集会所の様子から感じられた。たとえ離れてもみんなと過ごしたこの時間は思い出となり、きつと心に温もりを与える。 音



おがるスターズで企画した夏祭り



初めてのイベント「クリスマス会」

## 頼り上手はつながり上手

卸町五丁目仮設住宅自治会（宮城県仙台市若林区）



### 女性役員中心の自治会運営

宮城県仙台市若林区にある卸町五丁目仮設住宅への入居は、仮設住宅としては遅い2011年8月から始まった。周りは工業団地で、スーパーマーケットなどが少なく最初に入居したのは5世帯だった。しかし、徐々に入居者が増え、現在は85世帯が暮らしている。入居者は仙台市内をはじめとする宮城県各地、さらには福島県から引っ越してきたため知り合いが少なく、また世代も幅広いため、世帯数は増えても仮設団地自体に活気はなかった。

そのなかで、集会所の利用方法や、仮設住宅に暮らす人の行政情報の伝達のあり方、ゴミ集積所の管理の方法など、生活に密着する問題をどう解決するかが課題だった。

自治会設立に向けて住民総会が2011年11月に開かれ、自治会参加経験のない4人の女性役員が選出された。4人はそれぞれの個性を生かして、集会所の活用方法、ゴミ集積所の当番、

各班長の役割分担など、生活の課題解決に向けて動き出した。さまざまな地域から入居しているため、まずはどのような人が住んでいるのかを把握しようと名簿づくりに取り組んだ。「どうすれば効率的に自治会運営を行うことができるのか、アイデアを出し合い、みんなで話し合いながら決めた」と副自治会長の松木ひろみさんは当手を振り返る。名簿づくりのために一戸ずつ訪問をして、名前と家族構成とともに緊急連絡先を聞いて歩いた。また各棟に班長を配置することで、行政情報などの生活情報が早くいきわたるようにした。

入居者の交流を深めようと自治会ではじめて行った



卸町五丁目仮設住宅の集会所



## 卸町五丁目仮設住宅自治会

副自治会長 松木 ひろみさん

「御町五丁目で出会った人たちとは、  
いつまでも友だちとしてつき合っていきたい」

クリスマス会は、「自治会でできることは自分たちでやろう!」と、料理の準備や会場の装飾まで住民で行った。料理の得意な高齢者には、「味付けがうまくできないから教えてくれない?」など、声をかけることで参加しやすい環境をつくった。「自分に役割ができることではりきる人も多かった。みんなで協力することで、住民同士の交流のきっかけになった」と松木さんは話す。

### 住民参加の「役割づくり」

卸町五丁目仮設住宅で自治会が立ち上がった11月は、入居が早かった仮設住宅では「自立」が目指される時期だった。「自治会が立ち上がったばかりだったけれど、支援の手に甘えられる雰囲気ではなかった」「だからこそ自分たちでなにかしないか……という気持ちになった」と松木さんは話す。

できることからはじめようと、気になっていたひとり暮らしの高齢者が外に出



野菜クラブの活動風景

る機会を増やすためのアイデアを考えた。挨拶などの声かけにとどまらず、花壇の水やりやイベント準備の手伝いなど、「地域での役割」をもってもらうことで外に出る機会をつくった。「地域での役割」は外に出る機会をつくるだけでなく、「生きがい」にもつながっている。地域での役割を果たしてもらおううちに、イベントを開催するときに先頭になって手伝いをしてくれる高齢者も増えてきた。

### 住民発のグループ活動と

#### 自治会との協働

集会所では交流のなかから、たくさんのグループ活動が生まれてきた。人が集

まることで、集会所は「お茶っこ飲み」の場に変身する。「みんなで食べたほうがおいしい」「みんなに食べてもらうとつくりがいがある」と手づくりの料理を持ち寄る人も増え、その場が即席の料理教室になることもある。

集会所で住民同士が料理を教え合っていたことがきっかけとなり「料理クラブ」もできた。集会所のキッチンを使ってみんなで料理をして食べる。先生も生徒も仮設住宅の住民だ。仮設住宅にある農園で野菜をつくる「畑クラブ」は自分たちの野菜をつくるだけでなく、つくった野菜を仮設住宅の住民に配る。こうしたことを通じて、自然に住



すずめ踊りクラブの練習

民の輪が広がる。古くから仙台市に伝わるすずめ踊りを練習する「すずめ踊りクラブ」は、若いお母さんたちが、なにかできないかと立ち上げた。高齢者の参加も増え、「踊ることはできないが、太鼓ならできる」と参加する人もいる。

自治会のイベント、クラブ活動をおして住民同士の交流は増えた。「クラブ活動が盛んになれば、自治会が交流の場を意図的に設けなくても、自然な交流ができる」と松木さんは話す。

「卸町五丁目で出会った人たちとは、いつまでも友だちとしてつき合っていきたい」という住民の声もあがっている。「仮設住宅を出ても、すずめ踊りなどのクラブ活動を通じて住民同士の交流が続けばいい」と松木さんは話す。

クラブ活動と自治会との協働をおして、住民のコミュニティ活動への参加を促し、それぞれの課題の解決を目指す。イベントの際の役割づくりによって、引きこもりがちな高齢者も活動に参加する場面も増えてきている。



## 一緒に帰ろう、故郷へ

◎「少しがんばろう会」(宮城県<sup>わたり</sup>巨理町)

### 故郷に帰る日まで

東日本大震災で津波被害を受けた宮城県巨理町。多くの家屋が流され、慣れ親しんできた地域から離れて暮らすことを余儀なくされた。それぞれが仮設住宅や民間借り上げ住宅などでの生活を続けるなか、離れていても地域のつながりを途絶えさせないよう、町内の仲間同士での集まりを重ねている人たちがいる。巨理町荒浜の住民たちだ。2012年4月に、もともと交流のあった65歳以上の住民14人で「少しがんばろう会」を結成。故郷の荒浜に戻る日まで、町内会のつながりを守っていき、それが住民たちの強い思いである。

みんながいれば、もう少しだけ、がんばれる

震災によって散り散りに暮らすことになった巨理町荒浜の住民たち。昔から隣近所との交流を大切に、町内会活動も盛んに行ってきた地域だったため、以前のようにみんなで集まれない

ことがとても寂しかった。仮設住宅で行われるイベントなど、何かしらの機会でもいいからみんなで話したいね」という声。また、そういった再会の機会でもあるイベントは、みなし仮設に暮らす人たちには情報が届きにくいいため、お互いにどうしているか気にかけていた。若い世代は、なかなか会えなくともメールでのやりとりで満足できるが、高齢になると会って話すのが一番だ。

築き上げてきた町内のつながりを途切れさせてはいけない、小さなグループでいいからなにかみんなが集まる場をつくらなければ、という住民たちの強い思いが、「少しがんばろう会」の結成に結びついた。会の名前には、荒浜に戻る日まで、もう少しだけみんなががんばろう」という気持ち

気持ちは離れない

「少しがんばろう会」の活動は、メンバーの多くが暮らす、巨理町の中央工業



できあがったはらこ飯をお弁当箱へ



あら汁もつくりました



思い出話をしながらみんなで食事



さけの身をほぐす作業。  
話に花を咲かせながらも手先は素早く動く

団地仮設住宅の集会所を拠点として行われている。月に1回ほど集まり、話をしながらお手玉づくりや軽運動などを楽しむ。季節に合わせた活動もあり、7月には仮設住宅に飾る七夕飾りづくり、10月には亘理町の郷土料理である「はらこ飯」づくりを行った。

集まったメンバーは、以前当たり前に行っていたように、昔話や近況を語りながら、充実したひとときを過ごした。顔を合わせる回数も少なくとも、定期的な以前の仲間たちと会えることで、「自分たちの気持ちは離れていない」と、結束を強めている。

震災により、住む場所が変わってしまった人たちはたくさんいる。住む場所が離れ離れになったことで、震災前のような深い付き合いが難しくなったことは否めない。しかし、地域が離れても長年縁を育んできた隣近所のつながりは保てる。そして、関係性を保持していくことの重要性が「少しがんばろう会」の活動から感じられる。今は離れて暮らしていても、いつかみんなで故郷に帰る日までに、亘理町荒浜の住民たちの絆はずっとつながっている。

専門家に聞く地域づくりのヒント!

絶対

遠くの親戚より近くの他人!



東北大学大学院医学系研究科 教授

末永 カツ子 (すえなが・かつこ) さん

仙台市発達相談支援センター(所長)を経て現職。障害者保健福祉計画の策定、地域ケアシステムづくり等を実践。東日本大震災後には介護施設へのボランティア活動や保健師活動へのスーパーバイズ等を行う。2011年度の宮城県被災者支援従事者研修の講師を務めた。

○やむなく入居した仮設住宅で

コミュニティづくりは、地域での日々の生活を安心できるものとし、生活の質を豊かにしていくために人と人がつながり・つなげる活動です。コミュニティには、一定の地域で共同生活を行うためにつながる「地域コミュニティ」と、共通の関心・興味・目的等でつながる「テーマコミュニティ」があります。

上記の3つの活動は、震災後いずれも、やむなく入居した仮設住宅という「地域コミュニティ」を舞台として、交流と絆を強め、支え合いの活動を広げていこうする「テーマコミュニティ」をつくる活動がクロスして展開されていることが特徴的です。

震災によってにわかにできた地域コミュニティ(仮設住宅)では、集会所を開設しただけでは交流ができません。誰かが声をかけ、高齢者、障がい者、子どもたちも参加できるような催しをしていくことが大切です。このようなテーマコミュニティづくりは、相互の交流・ふれあいを促進し、企画者も参加者も互いに元気をもらい、日々の生活への活力へとつながっていくのです。

○新たな生活をつくる源泉に

仮設住宅での生活は一時的なものです。しかし、短期間であっても、私たちは、その延長線上に、次の暮らしをつくっていくのです。震災という共通の体験を経て、「ともに生かされている」「ともに痛みや楽しみを分かち合

う」という共通の意識のもとでのつながりは、以前のつながりとは質の異なるものではないでしょうか。

- 「おがるスターズ」では、法人化し仮設住宅を離れたあとも仲間と一緒に活動を続けたいと考えている。
- 「卸町五丁目仮設住宅自治会」では、「ここで出会った人たちと仮設住宅を出てもつき合っていきたい」「住民同士のつながりが続けばよい」と話している。
- 「少しがんばろう会」では、仮設を出てからの荒浜での新しい暮らしのために、これまでの結束をさらに固めてこうとしている。

このように、仮設住宅での交流や仲間づくりにより回復された力は、仮設を出てからのつながりをつくり、生活する源泉となっていくと思います。

○コミュニティづくりの原点

これまで私たちの住む東北では高齢化が進み、「地域コミュニティ」が弱体化していることが指摘されてきました。しかし、この大震災で、多くの人たちの命を救ったのは「遠くの親戚」ではなく、「近くの他人」でした。震災直後には、あちこちで交流の少なかった隣人同士が声をかけ合い助け合う光景が報道されました。改めて、近くに住む者同士のつながることの大切さを確認しました。ここに、コミュニティづくりの原点があると思います。

無料

発行：2012年11月20日  
発行：全国コミュニティライフサポートセンター（CLC）  
〒981-0932 宮城県仙台市青葉区木町16番30号シンエイ木町ビル1F  
TEL：022-727-8730 FAX：022-727-8737 joho@clc-japan.com

## 全国に避難した約33万人の暮らしを支え合う

2011年3月11日に発災した東日本大震災と福島原発事故により、全国47都道府県、1200以上の市区町村に、32万6873人が避難または転居しています。そのうち、自県外に避難している人の数は、福島県から5万9031人、宮城県から8177人、岩手県から1702人です（2012年10月10日現在、復興庁発表）。このまま定住するのか、故郷に戻るのか、心が揺れている人も多くいます。

たとえ一時の仮の暮らしであっても、ご近所づきあいや地域とのつながりをもつことで、お互いに理解し、支え合い、豊かな暮らしを送ることができます。

避難先で地元の人たちとともに暮らし、支え合う取り組みを紙面で紹介するとともに、全国の支援者が交流して手をつなぐための媒体として、この情報紙をご活用ください。

### 都道府県別の避難者等の数

(2012年10月10日現在、復興庁、単位：人)

北海道	2,995	関東	34,474
東北		東海・北陸	2,906
青森県	1,247	近畿	2,947
岩手県	41,969	中国	1,917
宮城県	114,787	四国	541
秋田県	1,327	九州・沖縄	3,432
山形県	11,406		
福島県	99,229		
新潟県	6,366	合計	326,873

## 浪江町が町民の避難先へ復興支援員を派遣

福島県浪江町では、全国各地に避難した町民を支援しようと2012年8月1日、山形県山形市および千葉県千葉市に復興支援員を3人ずつモデル的に配置した。

「山形の人たちは温かくて、壁を感じることなく生活しています」「浪江町は医療過疎でしたが、山形市は医療機関が充実していて便利という声が多い」「母親にとっては、室内外で子どもと無料で遊べる場が多くて助かります」と話すのは、山形市に駐在する浪江町復興支援員の皆さんだ。自身も原発事故で避難区域となった浪江町から山形市へ避難してきた。山形



左より、復興支援員の畠山和夫さん、佐藤真敏さん、天野静枝さん

県内に避難している町民120世帯を戸別訪問している。

被災から1年8か月が経過し、町民からは「生活面での困りごとはないが、地元浪江の話をする場がほしい」との要望が寄せられている。現在、浪江町の郷土料理をつくって楽しむ交流会を11月に開こうと計画中だ。「浪江には、鮭の築場<sup>やなば</sup>で有名な鮭料理や、柚子をつかった料理があります」「それらのレシピ集をつくって若い世代に配り、浪江の食文化が途絶えないようにしたい」と抱負を語る皆さん。「先が見えないなかで抱えている町民の不安や悩みが、少しでも和らぐようにお手伝いをしたい」。

12月には、山形と千葉に駐在する復興支援員が集まり、第1回目の意見交換会が開かれる予定だ。県外に支援員を配置する浪江町の取り組みに注目が集まる。

小



復興支援員は地元NPOの事務所の一角に駐在している

福島県  
浪江町





秋田県  
湯沢市

# イベントで生まれる 新たな出会いを支え合う関係へ

◎ゆざわフレンズネット（秋田県湯沢市）

秋田県湯沢市では、東日本震災で被災し、湯沢市に避難した人々を支援しようと、住民たちがさまざまなイベントを企画している。活動しているのは市内のJA（農業協同組合）やNPO、ボランティア団体、社会福祉協議会、地域包括支援センターなどの9団体で結成した「ゆざわフレンズネット」だ。「なにか私たちにできることはないか。湯沢に避難してきた人たちにほっとしてもらいたい、そう思ったのがきっかけです」と話すのは、ゆざわフレンズネット代表の丹すみ子さんだ。

## 交流からつながりへ

まずはお互い顔を合わせて交流できるようにと、2011年4月に「一品持ち寄り昼食会」を開催。ただ、個人情報保護のため、市内に避難してきた人たちの住所や連絡先を把握できなかったため、市役所が配布しているお知らせに昼食会の広告を入れてもらって、参加を呼びかけた。

初回は、避難者43人が参加。ボランティアは50人を超えた。それぞれが自宅で作ってきたお惣菜に舌鼓を打ちながら、地元の話を楽しんだり、湯沢市の住民たちとお互いのことを話したりと、ゆったりとした時間を過ごした。参加者からは、「同じ境遇にいるのは自分だけじゃないということや仲間がいることを実感した」「はりつめていた肩の荷が少し下りたような気持ちになった」という声が聞かれた。その後も、県内の動物園に行ったり、カヌー体験を行ったりと、交流イベントを開催している。また、お互いの連絡先を交換し合い、イベントの知らせが入ったら、友人や知人に紹介するなど、自然と仲間の輪が広がっている。

故郷へ戻った人もいるが、つながりは切れてはいない。イベントがあるときには連絡し、参加を呼びかけているのだという。「電話越しに近況を伝えてくれて、元気な様子かわかってうれしい。縁あって湯沢で出会った仲間だか

## 「大阪府下避難者支援団体等連絡協議会」が発足／大阪府



# REPORT



大阪府  
大阪市

2012年5月12日、2千人以上の人が避難している大阪府下で支援活動に取り組む団体の連絡協議会が設立された。

連絡協議会は、大阪府下で避難生活を送る人々への仕事、教育、健康、賠償問題、心のケアなど、府下のどの地域にあっても必要な支援を受けられるよう、ニーズのくみ上げと情報提供を行うことを目的としたゆるやかなネットワークだ。設立時点で51団体が加入。弁護士会やNPO団体のほか、市町村社会福祉協議会も多く参加する。

立ち上げ総会では、実際に大阪で避難生活を送っている人から、現在の状況についての報告があった。福島県やその隣県から避難している人以外にも、首都圏から大阪に避難している人も多いが、そうした人たちが行政の把握から漏れていること。特に母子だけで避難している場合は、生活上の課題を相談する先がわからずにいる現状などが報告された。

支援団体には、弁護士会や司法書士会など、法律の専門家グループもいれば、元々は子どもの支援に取り組んでいたNPOなども参加している。連携の仕方も、ただ情報交換をするだけではなく、避難者を対象とした法律相談会に託児のサービスを提供したり、専門のカウンセラーを派遣したりと、それぞれの得意分野を活かした連携につながっている様子が伺えた。

震災から1年半以上が経過し、被災地から遠く離れた関西圏では、震災を過去のものと感じている人も多いという。福島の現状を伝え続け、支援を途切れさせないための連絡協議会の存在は、避難者にとって心強いものになっている。島

ら、これからも交流を続けていきたい」と丹さん。

## 新たな課題

2012年8月に男鹿水族館に行った際に、水族館までのバスの中での些細な会話から、宮城県石巻市から避難している人が2人いることがわかった。湯沢市の避難者は福島県からの人がほとんどで、まさか同郷の人が来ているとは思っていなかったため、お互いに涙を流しながら出合いを喜んだ。話のなかで、石巻市の情報がほとんど入ってこない状態だということも明らかになった。「福島県の地方新聞を湯沢市に送つてもらえるように手配し、福島の情報が入りできるようにしていたが、



代表の丹すみ子さん

これからは石巻市の情報を得る仕組みも考えなければ」と、ゆざわフレンズネットは決意を新たに示した。

イベント開催以外の時間にも交流が生まれている。丹さんが代表を務める、介護保険制度外で家事の手伝いや通院介助などの福祉サービスを行う「湯沢あかねの会」を拠点に、イベントで連絡先を交換した母子が訪れている。大型ショッピングセンターが近くにあるため、買い物で立ち寄り寄る人もいるという。丹さんは留守と重ならないよう、事前に連絡してもらっている。「一緒に来た子どもたちには、部屋で自由に遊んでいいよって話します。特別に何ができるってわけではないけど、訪れた人たちの話にゆっくり耳を傾ける時間をとりたいと思っています」

何気ない話から深刻な相談ごとまで、話の内容は多様だ。震災前は身近に小さな相談をし合える仲間がいたが、いまは新たな土地で一から関係をつくっていかなければならぬ。そんな避難者にとって心にとまった思いを自由に話せる人や場所があることは貴重だ。日常を支え合うふだん着のかかわりが、たとえ湯沢市を離れても切れないつながりを育む。

## 福島へ、兵庫から何ができるのかを考える／兵庫県 「避難サポートひょうご」も発足



兵庫県神戸市

# REPORT

2012年6月7日、兵庫県神戸市のこべまちづくり会館で、集い「あなたの近くの福島のこと」が開催された。認定NPO法人市民活動センター神戸とNPO法人エフエムわいわい、ご恩返しプロジェクトが共催したこの集いに、50人を超える参加者が集まった。阪神・淡路大震災で被災した兵庫県は、東日本大震災への関心も高い。遠く離れた兵庫県から何ができるのか、そのヒントを探る会となった。

集いでは、福島県で支援活動にあたった4人からそれぞれの活動の報告があった。その一人、神戸市社会福祉協議会から福島県災害ボランティアセンターに5か月派遣された長谷部治さんは、「復興計画づくりには、福祉のまちづくりの視点が重要。計画は地権者が中心になってつくられるが、一度できあがった計画にあとから福祉の視点を入れ込むことは困難であり、実際に住む人、また、その地域をよくしようと関わってくれる人を巻き込むことが重要」と話した。さらに、被災3県以外の地域から避難してきている人たちの遠慮度がとても高い、とコメント。被災者対象の集いや相談会を開催する場合も、3県に限定せず、避難者は誰でもアクセスできるように間口を広げておくことが大事と訴えた。

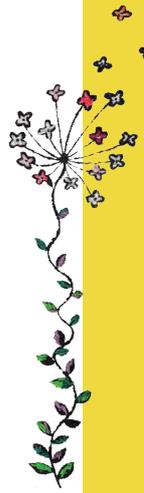
最後に、進行役である市民活動センター神戸の実吉威さんが避難者の実態を明らかにし、ともに考える機会を改めて設けたいとしめくくった。

なお、8月8日に兵庫県内の30の支援団体で構成する「避難サポートひょうご」が発足し、被災者に寄り添う活動を始めてい



兵庫県  
宝塚市

# つながりづくりから就労支援へ



◎宝塚NPOセンター（兵庫県宝塚市）

特定非営利活動法人宝塚NPOセンターでは、東日本大震災が発生した9日後の2011年3月20日に理事会を開催し、今後増えてくるであろう関西への避難者への支援を行うことを決定した。宝塚市役所が避難した人に市営住宅をあつせんすることを決めたのが3月23日。宝塚NPOセンターは、家財道具を運び入れるなど、人的な支援を申し入れ、NPOセンターの会員のみならず、報道などでNPOセンターの活動を知った住民とともに活動を始めた。

## 「お茶っこカフェ」から就労支援へ

宝塚市では、治療が必要な人は病院の近くに子どもがいる人は学校の近くになど、避難してきた人の生活状況に合わせて住むところをあつせんしてきた。この方法は、生活するには便利だが、避難した人同士のつながりができにくいと感じた宝塚NPOセンター事務

局長の中山光子さんは、「お茶っこカフェ」という避難者同士が集える場の開催を企画した。

月に1回開催される「お茶っこカフェ」はチラシを市役所の担当課が、周辺自治体の避難者向けニュースレターに同封して届けているので、宝塚市内だけでなく、近畿圏の各地から集ってくるのが特徴だ。「リラククスしてお話をしてもらえる場になるよう心がけている」と話すのは、お茶っこカフェを担当している小西しのぶさん。アロマセラピストの団体によるハンドマッサージを企画したり、託児ルームを設けて、母親たちがゆっくりとおしゃべりできるようにしたりと気を配る。

## 新たなスタートの背中を押してくれる場

お茶っこカフェは、時間とともにその形態が変化してきている。当初はつながりづくりが目的だったが、自宅に帰宅して元の生活に戻る人、宝塚に避難を続けてより



「お茶っこカフェ」で話も弾む

具体的な生活支援が必要な人、とそれぞれの環境の変化にもなつて、役割が変わってきたのだ。生活支援のより具体的な形として、現在では就労支援も行っており、かつてデザインの仕事をしていた人はチラシづくりなどに積極的に関わってもらったりしている。お茶っこカフェでの出会いをきっかけに新しい生活を宝塚で始めた人もいる。「支援する側の思い込みでなく、避難している人の現状に丁寧に寄り添っていくことが大切」と中山さんは話す。避難者によるセルフヘルプグループのサポートも行っているNPOセンターでは、関わりのある小団体が横につながるネットワークもつくる予定だ。



震災前はデザインの仕事をしていた、という避難者の方に制作を依頼したチラシ



宝塚NPOセンターでは、お茶っこカフェの1年間の記録をまとめた冊子を制作した。避難者や支援者、行政の思いなどがぎっしりつまった価値ある1冊。

DATA

特定非営利活動法人宝塚NPOセンター  
〒665-0845  
兵庫県宝塚市栄町2-1-1 ソリオ1-3階  
TEL 0797-85-7766 FAX 0797-85-7799

# まちづくりには「ひと」が必要

岩手県釜石市◎特定非営利活動法人@リアスNPOサポートセンター  
いわて連携復興センター 代表理事 鹿野 順一さん



岩手県  
釜石市



住民たちが気軽に集まる



2003年より岩手県釜石市で「まちづくり」の活動をしている@リアスNPOサポートセンター。震災によって津波被害を受け、活動が一時停止。復興までの道のりは相当な長期間に及ぶことが予想された。そんななか、他地域からの復興支援に来ている人たちの活動を目にし、「この地域で活動している私たちが援助を受けているばかりでよいのか？自分たちにできることをしよう」と活動を再開した。

## 住民の力を一つに

雇用獲得や人口流出などは、震災以前から抱えている地域の問題である。「まちづくりには「ひと」が必要であるため、釜石から離れないで暮らしていただけることを第一に、事業の展開を考えた」と鹿野さんは話す。そうして、震災後の緊急雇用事業を活用し、釜石市の住民へ仕事をつくっていくことを決めた。

その一つが仮設住宅の支援員の配置事業である。仮設住宅の住民自身が支援員として、困りごとの相談や、専門分野へつなぐ窓口となり、活躍している。住民自身の「自立」をサポートしていくことは、仮設住宅生活から移行し、次の新たなコミュニティ形成支援に長期的にかかわっていくことができる。この支援員事業は、地域の高齢化の問題に関与し、今後も継続する可能性があると話す。

震災復興支援の入り口やチャンスはたくさんある。地

元で活動していたNPOだからこそ、地域のニーズや地域性をうまく拾い上げ、つないでいく役割を担っている。「地元住民の声とさまざまな情報の受け皿として、ネットワークをより広げていく必要を感じている」と鹿野さん。住民同士の助け合いや、自発的な活動をサポートする市民活動の拠点として、人と人とのつながりを大事にし、被災地域の住民が復興への活動を通じて未来を得ることを本来の姿だと信じて歩き始めている。



拠点となる「かだつて」（\*「語る」を意味する東北の方言）には人が集まれる



# 住民同士の交流を広げる支援活動

宮城県山元町

## 山元町の取り組み

宮城県山元町では、東日本大震災によって被災した人たちへの支援を、行政、山元町地域サポートセンター、やまもと復興応援センター、山元町社会福祉協議会の4つの機関が、多様な支援活動を分担して実施している。集会所などでの交流会の開催や心のケア、料理教室などといった、さまざまな支援活動があるなかで特に印象的だったのは、山元町サポートセンターで行っている「配食サービス事業」と「サロン事業」だ。

## 集会所への配食サービス

「配食」というと、栄養バランスの良い食事を業者が利用者それぞれのお宅に届けるといったサービスを想像するが、山元町で行っ

ている配食サービスは、仮設住宅内の集会所へ配達するという特徴をもつ。希望する65歳以上の住民を対象とし、仮設住宅ごとに、週2回、300円の昼食限定で行われる。時間になると利用している人たちが一人、また一人と集会所に集まり、食事を楽しんでいく。みんなで話をしながら食事ができるようにと、このようになつた。

弁当は山元町地域サポートセンターの活動を一部受託している、社会福祉法人静和会の調理師がつくっている。栄養バランスのよい献立になるよう配慮されていることも魅力の一つだが、なにより「おいしい」と評判だ。利用している人たちも、「これを食べにくるのが楽しみ」と、太鼓判を押している。

毎回、その日のメニューとつくり方や食材に関する

豆知識が書かれたチラシを渡しており、そのチラシを話のネタに、会話が弾む。集会所での配食サービスで顔なじみになった人たちが、違う場でも挨拶するようになったりと、自宅に届ける配食サービスでは得られない住民同士の交流のきっかけになつている。

## 楽しみは、お風呂

サロン事業は、介護保険を利用していない65歳以上の住民を対象とし、山元町地域サポートセンターを拠点に、送迎付きのサロン活動を行っている。9時から15時半まで行われるサロンの目玉は入浴だ。「仮設住宅のお風呂はとにかく狭い。お風呂は好きだけど、ゆつたりと入れないからと、シャワーだけで済ませる住民も多いんです」と、山元町地域包括支援セン

## 山元町被災者支援体制

山元町地域サポートセンター  
一部委託：社会福祉法人静和会

- ・訪問事業（健康相談を含む）
- ・配食サービス事業
- ・サロン事業（図書コーナー含む）
- ・見守り愛ネットサービス事業

やまもと復興応援センター  
委託：社会福祉法人 山元町社会福祉協議会

- ・生活支援相談員による巡回訪問
- ・集会所等による交流の場の提供 等

社会福祉法人 山元町社会福祉協議会

- ・災害ボランティアセンター
- ・地域福祉推進事業 等

山元町  
山元町地域包括支援センター

- ・個別支援  
各種相談（健康・福祉等）、要支援者対応、応急仮設住宅環境整備
- ・地域支援  
こころのケア、料理教室、ボランティア育成

## ★仮設住宅入居者

平成 24年 8月 13日現在

仮設住宅名	入居者数	65歳以上高齢者数	65歳以上ひとり暮らし世帯数	65歳以上二人暮らし世帯数
旧坂中グラウンド	241人	73人	5世帯	10世帯
町民グラウンド	399人	145人	11世帯	14世帯
町民グラウンド北	70人	27人	6世帯	3世帯
浅生原内手	315人	65人	0世帯	8世帯
浅生原箱根	156人	55人	10世帯	5世帯
高瀬西石山原	176人	70人	14世帯	12世帯
(株)ナガワ仙台工場	279人	93人	25世帯	7世帯
浅生原東田	533人	162人	45世帯	25世帯
中山熊野堂	246人	84人	19世帯	9世帯
合計	2,415人	744人	135世帯	93世帯





# 事例をとおして考えよう！

宮城県内の被災市町では、被災者の生活を支援するために、各種支援員を配置して、戸別訪問や相談事業などを行っています。支援員の多くは、震災で家や職を失った被災者であり、介護や福祉の知識・経験のない人もいることから、宮城県が設置した「宮城県サポートセンター」支援事務所が関係機関と共同して、これら支援員対象の研修会を開催しています。期待される役割や個別支援と地域福祉活動の理解を深めることに重点を置いた研修では、基礎知識を学びつつ、グループワークを多用して、毎回さまざまな事例について白熱した話し合いが行われています。

このコーナーでは、毎月、実際に研修で使われている事例を紹介し、受講した支援員たちが事例に対して感じた生の声と、専門家による支援のポイントを掲載していきます。事例をとおし、あなたならどうするか、一緒に考えてみましょう。

## 今月の事例・アルコール依存症の泡盛さん

泡盛さん（男性48歳・仮名）は、82歳の母親と一緒に仮設住宅に入りました。津波で家も家業の飲食店も流されてしまい、二人は何もすることがなくなってしまいました。

震災までは、まちなかで仲間と一緒に仕事が終わって夜遅くまで飲んでいたこともありましたが、翌日の早朝の仕込みに遅れることはありませんでした。でも、この震災ですべてが変わってしまいました。一生懸命守ってきた土地も家も家族も仕事も失いました。この1年は生きることに必死でした。しかし、月日が流れ仮設住宅を訪れる人も少なくなり、テレビでの報道がほとんどなくなると、泡盛さんにはさまざまな問題が降りかかってきました。

経済的な問題もありますが、なにもすることがないので、もともと好きだったお酒を朝から飲んで昼ごろには泥酔状態になり、仮設住宅の道に寝転んで、道行く人に悪態をつけて絡んで喧嘩をするようになってしまいました。母親の年金もほとんど飲み代になってしまいました。母親を心配してくる見守り支援員さんにも「帰れー」と、座った目つきで威嚇するのです。

そのうち、家のなかでも動くことがままならないようになり、髪もひげも伸び放題。トイレに間に合わないことも頻繁で、きつい尿臭が周囲にまでただようようになりました。母親はみるみる元気がなくなり、やせてきました。周りにはすすすすもなく、遠巻きに見ているだけでした。

### Profile



永坂 美晴  
(ながさか みはる)

明石市望海在宅介護支援センター 센터長  
看護師、主任介護支援専門員。阪神・淡路大震災時に仮設住宅の支援に奔走。そこで得たノウハウを地域活動に生かすべく、地域の住民とともに「地域劇」などを開催。被災地の仮設住宅にはケアマネジャーとしても定期的に訪れている。

研修ではグループワークを行い、支援員それぞれが、事例の解決のためにどんなサポートが必要かをふせんに書き、意見交換をしています。研修で出た意見の一部を紹介します。

泡盛さんのお母さんから話を聞く

泡盛さんと仲間のつながり。以前は仲間をたのむことが多かったが、震災前は泡盛さんのお母さんから話を聞く

行うための泡盛さん宅に泊まり、仮設住宅の住人として生活する

飲食店の営業再開を促す。泡盛さんの家業の再開を促す。飲食店の再開を促す。泡盛さんの家業の再開を促す。

永坂美晴さんは、支援員による個別支援の段階の一つとして、「人を多角的に見る16の視点」をあげました。これは、当事者の思いや状況を整理し、解決に向けて関係機関と力を合わせるための視点です。

## 6 多くの資源に目を向けよう

- 本人にどのような問題が降りかかっていますか。
- 問題を解決するためには、どんな方法がありますか。
- 問題を解決するための協力者には、どんな人がいますか。

★既存のものにとらわれるだけではなく、いま欠けている部分を補える外部の資源も利用してみましょう。支援の可能性は一つだけではないはず。

## 7 人はそれぞれ違います

- 本人の価値観、人生のゴール、思考のパターンはどのようなものですか。

★人は同じ問題にぶつかっても、そこをどう切り抜けるか一人ひとり違いがあります。最も大切な、本人が価値を置いている生き方を満たすことが重要です。

## 8 医療や環境について知ろう

- 本人の問題に関する医療・健康・精神衛生などの情報は、どのようなものがありますか。
- 本人を困む地域環境・住環境に、気になる点がありますか。
- 家族との関係はどうか。

★本人の状態によって、私たちにできること、できる可能性があることが明確になります。本人を支えるすべてをひとりでやる必要はありません。私たちはひとりじゃないのです。認知症や障がい、環境の問題など、さまざまな問題を知ることによって、ほかの支援者たちと協力し合い、本人を支えることが大切です。

## 4 本人の望みはなんでしょう？

- 本人のどのような悩みが満たされないために、この問題が起こっているのでしょうか。

もし本人の望みがわかりにくいときは、「もしも状況を変えることができたなら、どのように変えたいですか？」と問いかけてみましょう。

★同じような出来ごとであっても、人によりとらえ方が違います。

## 1 いま、本人は、なにが一番困っていますか？

- 本人の様子から思い当たるものはありますか。
- 本人の発した言葉にSOSのサインが含まれていませんか。
- 家族や近所の人たちからの情報のなかに、鍵になる言葉はありませんでしたか。

★本人や周りにいる人たちのちょっとした言葉や行動から、私たちが見落としていた本人の苦しい思いに気づけるかもしれません。

## 2 現在の状態や経過を知ろう

- どのようなことが原因だったのでしょうか。
- その状態はどのくらいの期間続いていますか。
- いつ・どんなことで・どのくらいの頻度で症状が出るのでしょうか。
- 本人やその周りの人たちにどんな影響がありましたか。

★本人の状態をよく知ることから支援は始まります。

## 3 みんなの気持ちを整理しよう

- 本人は、自身のいまの状況について、どのように感じていますか。
- 家族やまわりの人たちは、どのようなことを考え、どんな行動をとっていますか。
- あなた自身はご本人の状況をどう考えていますか。
- 本人やそのまわりの人たちにどんな影響がありましたか。

★本人の思いとまわりの思いを照らし合わせることで、なにが必要かが見えてきます。

# 今回のキーワード 人を 多角的に見る ポイント

16の視点のうち、編集部が8つにまとめたものを掲載します。

## 5 本人の可能性を引き出そう

- 本人の長所はなんですか。
- 本人の能力はなんですか。
- 本人やそのまわりの人たちにどんな影響がありましたか。

★いま、表面に現れている姿だけで「問題のある人」と見てしまうのではなく、本人のもつ、今は見えにくくなっているかもしれない、長所や能力を活かすことに目を向けてみましょう。

## 専門家が話す★支援のツボ

### 初心を忘れず、かかえ込まず 他機関や専門職と協働して支援しよう

日々の実践で、このような事例と出会うことは少なくないと思います。支援員の声からは、何とかしようとする皆さんの一生懸命さが伝わります。しかし、泡盛さんのような複数の課題をかかえる家族に対する支援は、ひとりの支援員や一機関で解決することは困難さが伴います。

泡盛さんやご家族がかかえる複数の課題に取り組むには、広い視野でひとつずつ絡み合った糸の結び目（課題）を解くようなかかわりが必要なのです。支援員には、基礎的な支援力、つなぐ力、そして忍耐力



### 大坂 純さん

(仙台北百合女子大学人間学部総合福祉学科 教授)

#### ●プロフィール

仙台市立病院医療福祉相談室を経て、2007年より現職。社会福祉法人ありのまま舎理事長。特定非営利活動法人雲母倶楽部理事長。宮城県が実施する支援員対象の研修での講師も務める。

が要求されます。

課題が深刻で早期の支援を必要とする事例の支援のツボは、かかえ込まず、所属機関で上司や同僚に相談し、ともにかかわってくれる人をつくる力、他機関や専門職に発信する力が必要です。そして、保健所や医療機関などの保健師・ソーシャルワーカーなどに相談しながら、連携・協働してネットワークによる支援体制を整えることが肝要です。

3回目

市民リレー

# 東北の元気

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

今回は...

## ボンボンカフェ

◎宮城県 石巻市、東松島市、女川町



ボンボンカフェ外での開催



大学生も参加しています



お母さんたちの会話も弾みます

石巻市、東松島市、女川町で「子育ての環境を良くして、安心して出産、育児を行える環境づくりを！」と、ボンボンカフェは出産、子育てに対する誰もがもつ不安・悩みの解決を目指し、2011年8月から移動式のサロン活動を行っている。

「子育てをするお母さん目線で、地域の子育ての情報が集まって、悩みをお母さん同士で相談できる場所があればいいな」と、サロン活動を石巻市内で行っていた荒木裕美さんと助産師として震災の支援を行っていた柴田洋美さんが中心となり、ボンボンカフェの活動は始まった。

「自身の子育てをとおして不安に感じていたことは、子育てをするお母さんすべてがもつ悩み。それらを共有、解決できる場所が地域にたくさんあれば、誰もがこの地域で子育てをしたいと思えるような環境につながる」と荒木さんは活動をはじめた想いを語る。  
ボンボンカフェがたい

せつにするのは、地域にネットワークをつくることだ。活動には子育て中のお母さんだけでなく、産婦人科医、石巻市内で子育て支援活動を行ってきた人、行政職員などが参加する。「お母さんだけではどうしてもできることに限りがある。地域で子育てをできる環境を整えることは、誰もが生活しやすい環境につながる」と柴田さんは話す。

安心して子育てのできる環境を整えたいと始まった活動は、地域のつながりを紡ぎ、新しい動きへとつながっている。ボンボンカフェの参加者のなかには、「自分たちでもなにかできるのでは…」とほかの活動の立ち上がりへの芽が育ち始めている。「ボンボンカフェにもできることには限界がある、ほかの活動のきっかけになればいい」と荒木さんは話す。ボンボンカフェは「Bond Born(絆を生む)」だ。ボンボンカフェでできた絆が、地域の活力へとつながっている。**竹**

宮城県サポートセンター支援事務所  
〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町3-7-4  
宮城県社会福祉会館3階  
TEL 022-217-1617 FAX 022-217-1601

## 「被災地のサポートセンター行脚」

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

気仙沼市の本吉地区にあるサポートセンターの「顔」は、女性版「弥次・喜多」コンビの存在である。この2人の動きを見ると、被災者支援の基本がなんであるかが伝わってくる。日々の生活を通じて支えていくことに長じている。

弱く、もろい心持ちを育むように寄り添う距離感が絶妙である。高齢者の生活支援に携わってきた経験を、被災者支援に活かしている。その熱い想いを押しつけず、お年寄りが自然に元気になっていく「力」を引き出すのは、単に介護・福祉の専門職であること以前に、人に伝える、伝わるメッセージ性のある人柄だからだろう。

認知症のおばあちゃんが、被災した自宅で家畜とともに暮らすための支援にあたった経緯を聞いたとき、本人の意思を尊重

して、自宅での生活が継続できるように支えた「弥次さん」「喜多さん」の行動力に圧倒された。それまで高齢者の地域生活を支えてきた際の姿勢が、この震災時にも活かされているのだと実感した。

そのような2人なので、サポートセンターの仕事に忙殺されないか心配である。時には活動をセーブする必要もあるように思うが、そんな忠告は2人の眼中になく、今日も飛び回っていることだろう。そんなサポートセンタースタッフの「いま」を支えていくことこそ、私たち宮城県サポートセンター支援事務所の役割である。

がんばりすぎないように、というメッセージを届けながら、サポートセンターを行脚している。

### ◎宮城県被災者支援従事者研修 基礎研修

日時：12月17日（月）～19日（水）

対象：主に内陸部市町村で新たに雇用された支援員及び支援に携わる関係者

場所：駅東地域交流センター（宮城県美里町）

問い合わせ先：特定非営利活動法人全国コミュニティライフサポートセンター  
TEL 022-727-8730

## MESSAGE

サポーターのあなたへ！

### 支援員からの相談に 浜上さんがお答えします。

宮城県サポートセンター支援事務所  
アドバイザー 浜上 章



Q

住民が中心となって地域を見守る力は、どのようにつくっていけばよいでしょうか？（支援員からの相談）

A

住民主体の見守り活動を行う場合に大切なことは、住民の多くが、ひとり暮らしや障がい、認知症、一人親世帯などの問題を他人ごととしてではなく、自分や家族、地域のみんなの問題として認識することです。そのために、住民座談会などの話し合いの場をもち、見守り活動の重要性をみんなで共有し、自分たちでできる活動を考えてみましょう。

そのなかで、①地域にはどんな見守りを必要としている人がいるのか？ ②自分たちでできる取り組みはどんなことか？ ③日ごろからつながりづくりをどう進めるか？ ④緊急の場合にどう対応すればよいか？ ⑤生活支援相談員などの支援員や民生児童委員、行政担当者との連絡体制をどうするか、などを話し合っ、確認しておくことが大切です。

自治会がある場合は、役員さんから住民に呼びかけていただき、話し合いの場をもって、上記のテーマを話し合ってみましょう。

仮設住宅の各棟ごとに、見守りや声かけをする当番を決めて行う方法や、地域内で“見守り隊”のようなグループを募って行う方法もあります。メンバーには、高齢者や子どもも参加できるようにするなど柔軟に。また、カーテンの開閉、サロンでの出欠確認など、方法も一律ではなく、本人の希望する方法を尊重して工夫してみましょう。

見守りの際、気をつけたいことは、“監視”的にならないことです。さりげなく、優しく思いやりをもって、“お互いさまの気持ち”で活動ができるといいですね。

#### 【プロフィール】

鳥取県生まれ。兵庫県川西市、兵庫県と大阪府の社会福祉協議会で地域福祉活動の推進や個別支援に携わる。気仙沼市社協災害ボランティアセンターの支援に関わったことが縁で、2012年4月より宮城県サポートセンター支援事務所アドバイザーとして、サポーターの研修等支援にあたっている。

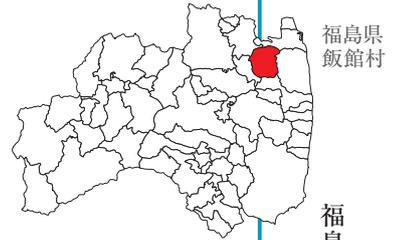


菅野ウメさん

この日は、  
過ら皆で  
つが、日  
つ国げ、日  
笑全から  
つは、おす  
つはの謝  
やの揺感  
うち支に  
こせごま

福島県飯館村の住民が避難生活を送る福島市の松川工業団地第一仮設住宅。被災前から飯館村で地域活動に取り組みってきた佐野ハツノさんは、仮設住宅内の集会所の管理人として、住民が活躍できる「場づくり」を行い、長引く避難生活のなかで村民の心の支えとなっている。

当初、慣れない生活環境のなかでストレスを感じ、元気をなくしてしまう高齢者が大勢見受けられた。被災前は村で中心になって地域活動に取り組みんでいた菅野ウメさんもその一人。昔から和裁が得意なウメさんに元気になってもらうため、佐野さんが「講師になってほしい」と声をかけて始まったのが、伝統的な着物をふだん着として仕立て直す「までい着」プロジェクトだ。その後、すぐにウメさんに習いたいと数人の女性が集い、集会所で制作活動が始まった。「いいいてカーネーションの会」と名づけられたこの活動には11人の住民が集い、週2回集会所での制作をとおして絆を育んでいる。できあがった商品は、関東のデパートで行った展示から販路



福島県飯館村

福島県◎いいいてカーネーションの会



着物をほどこ作業をしながら談笑

も広がり、全国から問い合わせがきている。「ここにおいてよかったと思ってもらうために、まずはなんでも自分たちでやることが大切」と笑顔で語る佐野さん。ひとりの女性の生きがいがづくりをきっかけに始まった「いいいてカーネーションの会」から、飯館村の新たな特産物とたくさんの方の元気が生まれている。

購読者を募集しています!

「月刊 地域支え合い情報」を年間購読しませんか? お知り合いの方へのプレゼントにもご利用ください。

- 購読会員 年3,600円(年12回、送料込み)
  - 支援会員 1口3,600円(年12回、送料込み)
- ご指定いただいた先へ、それぞれ年12回お送りします。指定がない場合は、編集部が選定する被災都道府県・市町村の被災者の生活支援担当課、または社会福祉協議会のほか、全国に避難する被災者を支援する都道府県、市町村の被災者の生活支援課または社会福祉協議会に送付いたします。

購読ご希望の方は下記口座へお振り込みください。編集部にて確認次第、情報紙を発送いたします。

<お振込先> ●ゆうちょ銀行振替口座  
口座番号: 02260-9-46303  
加入者名: 全国コミュニティライフサポートセンター

※通信欄に、「地域支え合い情報紙 購読費」と記入したうえで、①お届け先の住所と②何号からの購読申込みか、支援会員の方は③希望する送付先のあて名、または④「指定なし」と記入してください。

☆次号予告 特集「次の暮らしを考える」

読者の声

月刊「地域支え合い情報」は、コミュニティ(地域づくり)から震災・復興を考え、提案していくために生まれた情報紙です。みなさまからの率直なご意見が本紙を大きく育てます。ぜひ忌憚のないご意見・ご感想をFAXまたはメールにて編集部までお聞かせください。あわせて、お勧めの取材先などの情報もお寄せください。うちに取材に来てほしい!という方もぜひ!

- 2号を読んで...
- 宮城県の情報がなかなか届かないので、こういった情報紙があるんだと、驚きました。さっそく購読会員になります。(山形県Tさん)
  - この情報紙に掲載している活動を読んで、自分にもなにかできるかもと思える人が増えるんじゃないかな。(気仙沼市Wさん)

編集後記

☆仮設住宅での暮らしは一時的なものかもしれない。それでも仲間をつくるのがたいせつなんだ、いまだけの仲間ではない、これからもつながり続けるのだということを確信しました。そして離れてもつながりは維持できる。この仲間づくりの輪が多くの場所に広がると思います。(菅原)